

2025/1/31(金)シリーズ平和教育学講座 実践報告用

## 平和の礎の戦没者情報を教材とした平和教育実践

琉球大学教育学部

北上田 源

Mail: kitaueda@edu.u-ryukyu.ac.jp

### 【自己紹介】

- ・学生時代から「平和ガイド」活動を継続(約25年)
- ・市民団体「沖縄平和ネットワーク」事務局長(8年)
- ・沖縄県内のフリースクールで勤務(約20年)
- ・2021年～現職(専門:平和教育/異文化間教育等)



### 【今日の報告の流れ】

1. 教材作成/授業実践をする上での問題意識
2. 平和の礎の戦没者情報とは
3. これまでの授業実践/活用例
4. 今後始めようとしているプロジェクトについて

## 1. 教材作成/授業実践をする上での問題意識

- ・沖縄においても体験者の減少や教員の世代交代の進行などにより、従来と同様の平和教育の実施が困難に。特に、平和教育で活用する教材の不足が課題。

(北上田2023,2024参照)

- ・もちろんこれまで作成/蓄積されてきた沖縄戦に関する資料や教材は数多くある(書籍/証言集/映像/写真/動画/新聞など…)。ただ、現場の教員が求めるのは

(1) **学校のある地域に関連する教材**(地域による戦争の実相が大きく異なるため)

(2) **発達段階に合わせた教材**(刺激が強い/難しいものは敬遠されやすい)

(3) **課題解決/探究学習につながりやすい教材**(総合学習での取り組みなどが増加)

であり、既存の資料・教材が十分にそのニーズにこたえるものになっていない/教員が適切な教材にアクセスしやすい状況が整備されていないのが課題

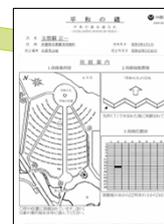
## 2. 平和の礎の戦没者情報とは

- ・平和の礎…1995年に沖縄県が建設した記念碑
  - ・「沖縄戦」戦死者の名前が、年齢・国籍・立場に関係なく約24万人分刻銘されている。
  - ・沖縄県出身者については、「沖縄戦」だけでなく、1931年～1946年までの戦死者が刻銘の対象となっている。(被爆者はそれ以降現在まで)
  - ・沖縄県出身者については、建設前の1993～94年にかけて全県規模での戦没者調査(協力者約1万人)が行われたうえで刻銘されている。
- 沖縄出身の戦死者については、出身地/生年月日/戦死場所/戦死日時がわかっている。

**→ 同情報を平和教育教材として活用のために県から提供を受ける(県内出身約15万人分)**



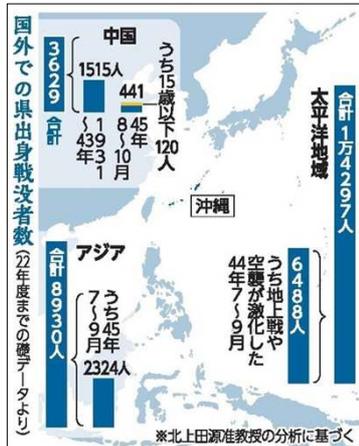
現在でも、平和の礎の刻銘検索機(平和公園内に3か所設置)で検索すると、戦死者情報は閲覧可能



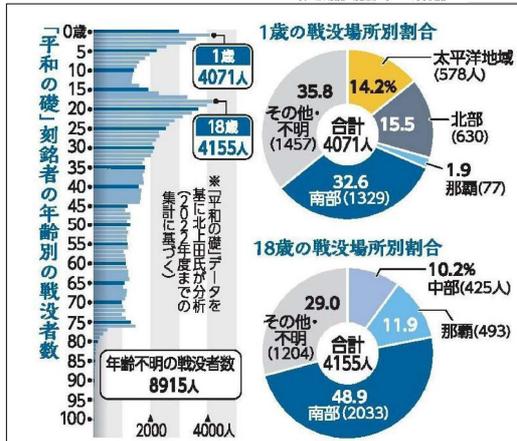
| 平和の礎                                       |            | 沖縄県              |
|--|------------|------------------|
| 平和の波永遠なれ<br>- EVERLASTING WAVES OF PEACE - |            | 2020/06/10       |
| 氏名   | 玉那覇 正二     |                  |
| 住所   | 沖縄県伊弉諾市西新町 | 生年月日 昭和5年1月1日    |
| 死亡場所                                       | 糸通市山城      | 死亡年月日 昭和20年5月10日 |

## 2. 平和の礎の戦没者情報とは

・戦没者情報の分析を通して見えることの例



琉球新報 2025年1月4日記事より



琉球新報 2025年1月1日記事より

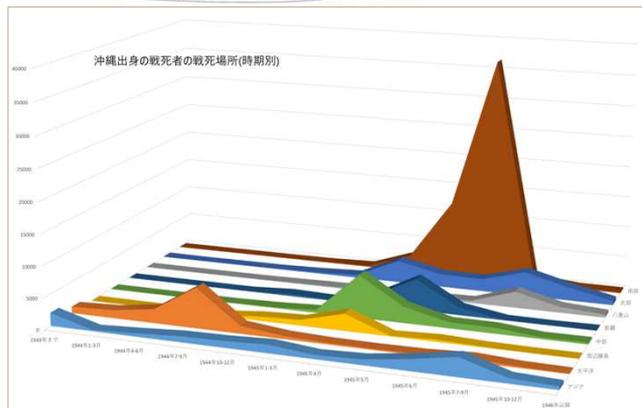
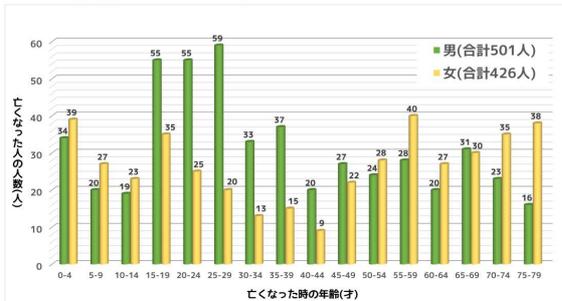


## 2. 平和の礎の戦没者情報とは 戦没者情報の分析を通して見えることの例

沖縄のある小学校の校区出身の戦死者のグラフ(年齢/性別ごと)  
※2022年に教材として作成したグラフ

### 校区出身の人がどれくらい亡くなっただろう？

大里北小学校の校区出身の人が、沖縄戦の時にどれくらい亡くなったかを調べました。さらに、亡くなった人の性別や年齢を調べてグラフにしました。亡くなった人の中には、年齢がわからない人も約20人いました。その人たちの人数はこのグラフには入れていません



沖縄出身の戦死者の戦死場所の推移(時期別)  
※2024年に教材として作成したグラフの一部

### 3. これまでの実践/活用例

#### 【複数の小中学校で行ってきている授業実践例】

- ・校区出身の戦死者の情報をもとに、グループで戦死場所の地図にシールで貼っていく作業をする。
- ・時期ごとの戦死場所の変化がわかるように地図を張り出す。



- ・子どもから出てくる様々な気づき/疑問を共有し、話し合い。

#### 戦没者の性別・年齢などについて分かったこと

- 1945年3月に亡くなった人がだいたいの男の人
- 赤ちゃんやいろいろな人がなくなっていることがわかった。
- 男の人は、戦争に参加させられたからなくなっている人が多い。
- 6月前半は、年齢問わずなくなっている人が多い。
- 大人の男の人が亡くなったのが多い
- 男の人がなくなっているから、兵隊さんが多かったと思う。
- 大里で高齢者がなくなっている。
- 老人が多くなっている。
- 子どもも、たくさんなくなっている。

#### 疑問に思ったこと

- なぜ、5月に降参しなかったのか。
- なぜ、6月の前半は戦没者が多いのか。
- なぜ、糸満に逃げたの。
- なぜ、糸満での戦没者が多いのか。
- なぜ、広がっていたのに集まってきたのか。
- なぜ、糸満などの南部に逃げたのに北部にはほとんど逃げていないのか。
- なぜ、大里と糸満の死者が一番多かったのか。

沖縄のある小学校で実践した際に、子どもから出てきた気づき/疑問(2023年実施)→

### 3. これまでの実践/活用例

#### 【意識してきたこと】

- ・私がすべて行うのではなく、先生方と協働で行う。(教材のみ提供/1クラスのみ担当など)
- ・校区など子供たちにとって身近な地域を選んで活動(県内どここの地域でもマップ作成可能)
- ・この活動だけで完結しないように「次の活動」を意識した疑問を引き出す

#### 【他の活動とのつなげ方の例】



戦死場所地図作成

疑問に思ったこと

- なぜ、5月に降参しなかったのか。
- なぜ、6月の前半は戦没者が多いのか。
- なぜ、糸満に逃げたの。
- なぜ、糸満での戦没者が多いのか。
- なぜ、広がっていたのに集まってきたのか。
- なぜ、糸満などの南部に逃げたのに北部にはほとんど逃げていないのか。
- なぜ、大里と糸満の死者が一番多かったのか。



6年生向けに作成した証言教材(2022年)

証言を読む



小学校の先生と一緒に聞き取り/作成した証言動画(2023年)

映像を見る



平和の礎で刻銘を探る高校生

現場に行く

## 4. 今後進めていこうとしているプロジェクトについて

### 【やりたいこと】

- ・特設ページ上に平和の礎の刻銘を再現(どこからでも「礎」を見えるようにする)
- ・ページ上で刻銘者の情報をポップアップ表示  
(どこからでも/現地でも調べられるように)
- ・子どもたちを含む多くの人から戦死者に関する情報を募り、チェックの上で同サイトで表示  
(個々の記憶を共有し、継承していけるように)

### 【これができれば】

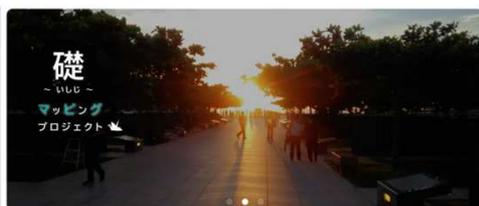
- ・「礎に情報を追加していく実践」への参加を平和学習のゴールに
- ・多様な形で/現地での探究活動も可能に(資料館との連携など)



## 関連論文・サイト紹介

- ・北上田 源(2023)「沖縄県内の公立小中学校における平和教育の実態と課題(1) - 県教委調査および担当教員・学校長インタビューの分析を通して -」『琉球大学教育学部紀要第103集』 pp. 121 - 147
- ・北上田 源(2024)「沖縄県内の公立小中学校における平和教育の実態と課題(2) - コロナ禍における沖縄の平和教育および市町村教育委員会の取り組み」『琉球大学教育学部紀要第104集』 pp. 35 - 57

【これまでに作成してきた教材の一部をHPで公開「いしじマッピングプロジェクト」】



<https://ishijimapping.com/>





# 平和の礎刻銘14.7万人分データ分析

# 県出身者1歳と18歳最多

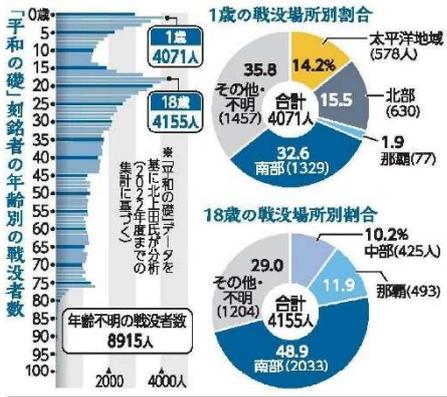
糸満市摩文仁の「平和の礎」に刻銘された沖縄県出身の戦没者約15万人分のデータを本紙はこのほど入手し、琉球大学の北上田源准教授(社会科学教育)の協力で、死亡年月日が分かる14万2千人余りのデータを分析した。それによると、年齢別では18歳と1歳が4千人を超え、最も多くなっている。沖縄戦のさなかの1945年6月には沖縄本島の南部で、同5月に比べて約3倍の3万6千人余りが亡くなっていった。子どもや若者を犠牲にする戦争の実相や、沖縄戦を指揮した第32軍が南部撤退による持久戦などを展開したことで被害が広がったことが改めて裏付けられた。

## 識者「弱い立場に犠牲強いた」

今回分析したのは2022年度までに刻銘された1931年の満州事変以降に亡くなった県出身者の氏名と生年月日、戦没年月日、戦没場所の内訳は、18歳は約半数が南部、次いで那覇、中部でそれぞれ1割を超える。日本軍にさまざまな形で協力させられたほか、住みさせられた話められた面も重なったと推察できるという。1歳は約3割が南部で、北部、太平洋と続く。多くの移民がいた太平洋では沖縄戦前年の地上戦があった。北上田源教授は「小さな子どもにも関して

は、収容所が置かれた北部や旧南洋群島での犠牲の多さが目立つ。18歳は軍隊の中で立場も弱く、危険な任務をさせられた側面もあるのではないかと。1歳や18歳の多さは、弱い立場の子どもや若者に犠牲を強いるという、国策や軍隊の特徴を表すものだろう」と話す。

南部のうち「戦没地が糸満市の人」は約3万6千人、5月は約5千人だが、激しい掃討戦のあった6月は約3万人に上る。出身別の内訳は糸満市出身者の6割以上、南風原の約5割、旧東風平の4割以上が糸満市でそれぞれ亡くなっていた。死亡年月日不明者は約7千人おり、今回の分析には反映していない。北上田源教授は「データの不備も指摘した上で、限られた情報だが積み重ねる時に見えてくるものがあると思う」と話す。(中村万里子)



# 礎データウェブで可視化

## 北上田 源さん(42)

(琉大教育学部准教授)

沖縄戦体験者が減少し、新たな平和学習の方法が模索される中、琉球大学教育学部准教授の北上田源さん(42)は、平和の礎刻銘者のデータに着目し、活用した学習方法を提案している。礎の建設に合わせて収集された沖縄戦戦没者の出身地や死亡年月日、死亡場所などの個別情報を地域ごとに月別時系列で整理・分析し可視化することで、沖縄戦の実相や特徴を学ぶことが狙い。平和学習の在り方を研究する北上田さんは「礎を介して対話を深める機会にしたい」と取り組んでいる。

北上田さんが取り組むのは「平和の礎刻銘のマップングプロジェクト」。昨年度から研究費を活用し、これまでに糸満市や南風原町など5市1町と2離島の各字ごとの戦没者情報を地図上で可視化してきた。県内小中学校で平和学習も実施し、ホームページで活用例も伝えている。



「刻まれている一人一人に家族や友人がいた」と話す北上田源さん=12月26日、糸満市摩文仁の平和の礎

北上田さんにとって平和の礎は、沖縄戦を伝える上で試行錯誤は、沖縄戦を伝える上で試行錯誤

きたつた。げん 1982年生まれ、京都出身。琉球大学在学中から基地問題や沖縄戦を伝える平和ガイド活動に取り組み。卒業後はブリースクール教員、沖縄平和ネットワーク事務局長を務め、2021年から琉大教育学部社会科学教育専修准教授。沖縄県の「恒久平和に貢献する万国津梁会議」委員。



宜野湾市嘉敷の戦死者データを使って作成した地図(いじまマップングプロジェクトホームページより)

## 小中で活用「対話深めて」

誤を繰り返してきた場所だ。県民が礎に刻まれた家族の名を指でなぞったり、思い出を語り合ったりする横で、京都出身である北上田さんは自分とつながりの薄さに戸惑いながらも、「この場所は何を伝えたいのだろう」と考え続けてきたという。

平和ガイドなどの取り組みも経て、平和の礎の教材化の過程で着目したのが戦没者情報だ。平和祈念公園内に設置されている検索機では、刻銘者の名前だけでなく死亡年月日や死亡場所を調べることができる。それを用いて平和学習の教材を20年かけて、こだわって作ってきた。

「沖縄戦を学んだ生徒から『かわいそう』『怖い』と聞くのが、感想にとどまっていなか。データに基づいて具体的に調べてみると新たな発見や疑問が生まれる。礎という空間を祈りだけでなく対話の場として深め、平和のため能動的になる学びを、目指したい」と希望を込める。

今年には平和の礎の建設から30年の節目。刻銘された人のデータには、命を奪われた場所が抜け落ちた人もい。北上田さんは追加記載の必要性を指摘する。「平和の礎は未完成だ。その空白を埋めるため、今こそ県民ぐるみの調査活動が求められている」と強調した。

(赤嶺玲子)